

# 探査機ミカンの旅

稲垣 奈名子

「宇宙に行くものを作りたい。」

三才の時、科学館に展示されているロケットのエンジンを見た私はこう母に言ったそうだ。

そして四十年の月日が経った。その間、太陽系以外にも固体の表面を持つ惑星がたくさん見つかった。そのうちの一つ、オリオン座大星雲の中にあるエヌ十六は私が発見した惑星だ。観測した結果、ブラックが大量にある

ことがわかった。ブラックは水や熱、しよ

げきに強い岩石だ。地球は私が子どもころ

に予測された通り温だん化が進み、夏の気温

は四十度を超えている。気候変動対峙はと

られてきたが、大雨や大型の台風が発生し自

然災害が多くなった。ブラックがあれば災害

に強い建ちく物を作ることができる。

そこで世界中の研究者が集まり、ブラック

を採取するプロジェクトが立ち上がった。私

はジャクサの研究者でありプロジェクトマネ



ジャー」となった。探査機はロケットで種子島から打ち上げられるが、探査機の管制室は宇宙エレベーターとつながっていてアイエスエスの中にある。私は射点に移った探査機ミカンに話しかけた。

「ミカン、調子はどう？」

ミカンには「エイアイがとうさいされているので、発声者を聞き分けることができると。そして各国から集まった研究者がミカンをそう作

するためには多言語に対応している。私には日本語でフレンドリーにこう返してくれた。

「私は順調よ。ロケットは大丈夫？」

「ロケットは正常だから心配しないで。ワイプする時は思いっきり加速するから気をつけてね。もう時間だね。」

「りょうかい！まかせて。」

ミカンはたのもしい。打ち上げ一分前。私は種子島のロケットの管制室から送られてくる映像を見る。ウォーターカーテンが散水開始した。ミカン、がんばれ。



「準備完了。メインエンジンスタート。リフトオフ！」

ロケットは順調に飛行し、アイエスエスツィのとなりに物理学者たちによって開発されたワイプソー置へミカンはたどり着いた。そしてどんどん加速してワイプ空間を進んだ。

「エヌ十六に着いたよ。」  
管制室にかん声が上がった。ミカンからデータが送られてくる。エヌ十六は地球と同じくらいの大きさのようだ。ミカンは着陸の準備

に入った。黒い大地が見えてきた。

「着陸に成功したわ。」

「次はプロペラを出してヘリコプターになって調査開始してね。」

「オッケー！」

ミカンは正常に動いている。映像とともにエヌ十六のくわしい情報を教えてくれた。

「酸素は少しだけ。空はオレンジ色、地面は黒いゴツゴツした岩石がしきつめられているわ。気温は二十五度。」



「ミカン、一メートルを超え山を探して、  
 その山のふもとにブラックがあるはず。  
 「オツケ。一万八千メートルの山があった。  
 わ。ドリルを出してほるのね。  
 すると大量のブラックが見つかった。ブラッ  
 クは名前の通り、黒色で直径一センチメー  
 ルでだ円形。表面はガラガラしている。  
 「ミカン、ブラックを一キログラム持ち帰っ  
 てくれる？」  
 そしてミカンは任務を終えて無事帰らんし

た。持ち帰ったブラックはアイエスエスツ  
 の中で研究される。

探査機のミカンという名前は私が飼ってい  
 る犬の名前からつけた。理由は二つある。一  
 つは外国の研究者はミカンという言葉を知ら  
 ない。なので話の種になり親しくなれる。もう一  
 つは探査機を機械だと思っていないからだ。  
 私は探査機をチームの仲間の一人だと思っ  
 ている。任務が終わったあとスペースデブリと  
 なったり、大気けんとつ入らせて失いたく



ない。今はワープができるようになったため飛行時間が少ない。こしようもだいぶへった。探査機は元気に帰ってくる。最後は子どもたちも知ってもらったため科学館に展示されている。私はこれからも世界の研究者と一しょに地球に住む人々の生活に役立つ惑星探査をしていきたい。